

◆2010年 1月

八木健選「七句」・・・（七七をつけて見ました）

- 1 無造作が癖になりたる木の葉髪 （越前春生）  
・・・その散り方も無造作ならむ
- 2 煤逃げというより邪魔と追い出され （黒澤正行）  
・・・行く先々でやはり邪魔者
- 3 余所見してペンギン転ぶ冬日和 （田村米生）  
・・・それを見ていた人もつられて
- 4 マスクして他人のマスク怖がれり （むつみ）  
・・・他人も恐れみるやも知れず
- 5 羨しとも河豚提灯の全き歯 （山本あかね）  
・・・六月四日に表彰せにやあ
- 6 晩年のデートはいつも日向ぼこ （渡辺さだを）  
・・・人畜無害とは情けない
- 7 地下鉄が地上を走る菊日和 （渡邊美代子）  
・・・陽気に浮かれ出てきたんかい

青山桂一  
凧や休み田に臥す傘ひとつ  
里下り違法駐車急に増え  
半月の聖樹建てあり俄使徒

秋月裕子  
宇宙から地球を見たき冬銀河  
初冠雪わが関節の痛み初む  
リコーダ吹くお利口さんに小鳥来る

麻生やよひ  
背の君のいまや白髪霜降る夜  
冬將軍手始めに狙う膝小僧  
風の擲楡どこ吹く風と返り花

足立淑子  
指突いた憎い一本針供養  
人の目に我関せずと猫の恋

高橋 都  
大仏のごと夫の煤払ひたし  
沼の秋主は河童か大うなぎ  
七五三一族郎党従へて

高橋素子  
熊手みたいよ何本も熊手買ひ  
濡れ落葉掃くを許さずしがみつく  
婚活の書類えんこら神の旅

高松雄三  
鋤焼の牛がお好きなマイお箸  
デパ地下の試食で祝へクリスマス  
いつまでも肩に寄り添ふ木の葉髪

滝沢安太郎  
ペチカの火少女の幻燐寸売る  
冬立てり平成維新の正念場

いぬふぐり力抜くこと忘れけり

有富洋二

初日の出いつもの山からお出になり  
揃いたる子へ大盛りの雑煮かな  
青年の顔しか知らない年賀状

有吉堅二

大きくさめ嚏といふ字忘れけり  
日向ぼけふも元気に死の話  
吾輩も猫でも飼ふか漱石忌

安藤淑子

居なくとも居ても事足る年の暮  
円高に北風すさぶ就活生  
歯を磨き孫はデイトに菊日和

飯塚ひろし

金貸して殖やす煩惱除夜の鐘  
聖樹の燈点し今宵は十字切る  
爆弾に良いの悪いの開戦日

井口寿々子

ワntenポ遅れて点るツリーの灯  
十二月何の句もなく策もなく  
白菜の一株厨豊かなり

井口夏子

たまには旅でもせよと冬の鳥  
松茸の香盗み嗅ぐデバ地下の  
あれこれと太らせくれる里の秋

池田無了

枯葉散る座敷の中にも濡れ落葉  
おでん鍋蛸行方不明と大搜索  
神無月貧乏神のみ居残れる

伊藤浩睦

マネキンの股間つると松ふぐり  
菊人形ハーフのような鎧武者  
傷秋や冤罪晴れぬ猫のいて

稲沢進一

電柱に頭ぶつけて流れ星  
霜柱昔百姓今詩人  
冬ぬくし窓のすき間に犬の顔

井野ひろみ

短日やわかたついても急ぐ足  
満月や月面基地のCG見る  
孫の口蜜柑むけるをじつと待つ

今城夏枝

蜜柑摘みばちばち空を鳴らしめる  
柊花細し厠は暗し  
天辺の柿や鴉を待つてゐる

越前春生

認知症冬帽のよく似合ひたる  
無造作が癖になりたる木の葉髪  
賭事に叶ふことなし神の留守

釣人の項垂れつれり暮の秋

田代青波

神の留守嘘に鼻孔のふくらめる  
老猫の聞えぬふりを小六月  
穴惑の尾に三尺を跳ぶ男

田中章子

ご褒美にお口にそつと一位の実  
クリスマスとけぬ魔法に輝きて  
冬蜂に針先元気かと問うて見て

種谷良二

見送りのキスはマスクをする前に  
海に雲丹山に毬栗言葉に棘  
禿頭で受ける時雨の一粒目

田村米生

帰り花焼け棒杭に火のつかず  
ふぐと汁みんなで飲めば怖くない  
余所見してペンギン転ぶ冬日和

飛田正勝

雄鳥のいつまで競ふ白鳥湖  
教え子も孫のはなしや七五三  
星無尽銀河鉄道駅無人

戸谷笑子

愚直にも縄の梯子と冬ごもり  
小言云ふ相方の居て冬ぬくし  
日向ぼこ終日うつらうつらかな

永井一朗

母おさな祖母若づくり七五三  
里日ごろり冬瓜寝て太る  
銀杏散る黄色い声を上げながら

永島董玉

毒舌に刺してやりたき河豚の骨  
熱爛を嚙りとつくり子を諭す  
夜目遠目笠の内なる頬被

西 をさむ

神官の牌をつまんで神の留守  
神の留守巫女はメールを打ちつけ  
就活に疲れ婚活神の留守

原田 暉

馬糞踏めば一等賞や運動会  
全身の螺子ゆるびゆく炬燵かな  
このたびも予感師走に宝籤

彦阪義久

律儀にも日ごと色増す熟し柿  
七五三集合写真五七五  
浮寝鳥山よりデカイ猪出ぬと

久松久子

秋の雲富士を見せたり隠したり  
毒草の仏臭して羅漢山  
どん尻は秀才児童運動会

笠 政人  
柊の花に刺されし鼻がしら  
穴の蛇異常気象に右顧左眄  
愛してる素直に言へずいのこづち

可知豊親  
蓮掘の抜くやでんぐりかへりけり  
皮下脂肪妻万全の冬構  
少年はゲームに夢中文化の日

加藤 賢  
猫の相それぞれ違ひ日向ぼこ  
金木犀もやもやとして枯れてをり  
釣竿の先視つめをり冬の鷺

加藤澄子  
カーテンに木漏れ日躍らせ冬ごもり  
紅南天熊楠ゆかりの庭を染め  
ちよつと太めよ誕生日の十三夜

川島智子  
咳をちこち満員電車の真ん中に  
東屋にぶらり屈託なき糸瓜  
バス・ケーブルまるで貸切秋吉野

北村真佐子  
あらかたに雲吸いこみし大花野  
名月や雲を従え参上の  
箸の先つるんつるんと小芋かな

久我正明  
献身の熟柿に集う小鳥かな  
裸木となり厚き皮にて肌隠す  
マフラーをハンガーとして首にかけ

草薙一朗  
別才の俳句に挑み木の葉髪  
旅人に「もつてのほか」の柿繪  
ジャンプして句史に輝く蛙かな

工藤泰子  
猫よりも大きなネズミ秋遊び  
ミッキーは大きなネズミ秋の園  
還暦や十月桜咲き乱れ

倉方 稔  
パソコンに筆順習ひ賀状書く  
酒汲めば障子に目あり厚目貼  
ファスナーにいちもつ咬まれ霜の夜

黒澤正行  
艶話老いてますます焚火の輪  
良く洗う女体に似たる大根かな  
煤逃げというより邪魔と追い出され

黒田忠一  
隙間風我が家は酸欠なりませぬ  
霧と靄先が見へないとこ似てる  
秋野菜ネズミが喰へば収穫期

日根野聖子  
舗装路を水玉模様にして時雨  
自らを分解山茶花散る時は  
大大根床に寝かせるやうに置き

広瀬遊亀男  
バブル散り裸木となり就職生  
嫁となる女の早食い走り蕎麦  
歯が落ちて今年は柿の当り年

藤岡蒼樹  
へのへの道辺の案山子雨滲み  
十月のごきぶり童話のきりぎりす  
肥満児へ塩にぎり飯馬肥ゆる

藤森荘吉  
冬に入る人生の無駄省きたし  
から元気初風が吹いてきて  
この辺で昔羅宇屋が日向ぼこ

藤原セツ子  
箱根路や落葉時雨と戯るる  
オリオンの星に占ひ露天風呂  
思ひ出の母の魔法の衣被

坊野留吉  
朝寒や尿りいざなふ震度3  
二人きり団栗おどす野の温泉かな  
山の宿霧はきまぐれ視界ゼロ

前川敏夫  
つんのめり威厳台なし懐手  
食べ頃の柿になるまで待つ鴉  
あばら屋の紅葉の一点豪華主義

松尾軍治  
禿頭尻から入る柚子湯かな  
テロリスト家にもどりて煤払  
駄句ばかり書いて一年忘年會

松田吉憲  
検温に來し看護師の大嚏  
妻待たず鯛焼二匹冷めぬ距離  
悴みて印押ししてをり誓約書

丸山紘一  
我が「滑稽」卑俗止まりで年暮るる  
風邪マスクつひでに七難隠しをり  
暮の寄席円樂悼みて泣き笑ひ

三塚不二  
裸木に立つ着脹れの人となり  
木枯らしや箒を立てて立ち話  
底冷えのホームで待つたばつかりに

三橋一笑  
階段を二段跨ぎや合格子  
剣道部素振りや寒を面々と  
合格子青空蹴つて逆上り

小杉 隆  
飛入りの妻の毬つき菊日和  
熊手売り旦那と呼びかく幼友  
狛犬の欠伸に釣らる神の留守

桜井宇久夫  
何事もなし幾度もくしやみして  
神無月貧乏神と閉籠る  
木枯や名優の訃に十八番唄

佐藤古城  
地芝居の松を笑はす女形かな  
熊ん蜂仁王の臍を搦れり  
蟹食うて何やら少し横あるき

佐藤義子  
はずかしや若医者診るよかくしたや  
二次会断わり三次会顔見せ  
話好きフルコースハシ止め話す

佐野ゆきこ  
紅葉の山七曲がり大蛇登り  
煙り吐く背広のカラス集う朝  
冬の雨咲き競いたり傘の花

柴田真一  
ふかし芋ガス孕みつつ出る放屁  
窓開けよウサギ餅搗く月あかり  
裸木の頂点皇帝ダリヤ咲く

清水吞舟  
騙されてみたき女や狸汁  
一言に一言応へ夜長かな  
オレオレの電話もなくて蒲団干す

首藤虎男  
年古紙折込みチラシ読みの果  
観る武装素手で寒泳立向い  
砂上の楼閣嗚呼と楠柯の夢

壽命秀次  
おてんばの帯解き一日淑女の目  
袴着の爺ちやん真似る受け答へ  
髪置きに怪獣に変はる地団駄

白井道義  
コスモスの花占ひが腐れ縁  
一言の文句も言はず案山子立つ  
終日を老いの道楽松手入

杉村福郎  
二人ともマスク男の立ち話  
地を蹴つて鼯に音は無かりけり  
綿虫や宇宙の恋のかたちとは

鈴木和枝  
よく鳴く百舌だね  
風邪ひいていられない  
ハトが鳩らしく歩く大切なこと  
よちよち歩く鳩  
人間になりたがっている

虫倉蟬音  
縁側の隅が穴場よ日向ぼこ  
ママと呼び気分を変へる温め酒  
幼子のナでおしまい冬の星

むつみ  
しがみつく石を友とす鯪かな  
マスクして他人のマスク怖がれり  
冬めくや切符売り場の股火鉢

村上美和  
この島で生きこの島で死ぬ鹿の声  
デフォルメでリアルに描き紅葉山  
神の旅鳥居を守る千の星

百千草  
渡り鳥一羽逸れれば皆それる  
寝返れば骨の音する初しぐれ  
退化せし尻尾勤労感謝の日

森 要  
羨まし春なつ秋も冬も立ち  
耳遠く冬と小便近くなり  
神と妻留守で一人寝抱き枕

八木 健  
建て付けの悪しきを狙ひ隙間風  
風呂吹やふうふう法螺も吹きまくる  
イヴだけが日本人にはクリスマス

柳澤京子  
威嚇せし包丁手にし秋刀魚置く  
神無月夫の一喝震えけり  
稲刈りの美女お尻の月美かな

山内重昭  
あの月の裏は花野と想いたし  
新松子ころんごろりと一輪車  
野分はも北の田畑吹きならす

山下正純  
煮るほどに裏切りはなしおでん鍋  
来世は猫にてよろし日向ぼこ  
長櫛の謝りみたり木の葉髪

山本あかね  
羨しとも河豚提灯の全き齒  
お互ひに見て見ぬ振りの木の葉髪  
サンキューで終る放送冬ぬくし

山本けい子  
熊野古道の苔を濡らして夕時雨  
野路菊に歓迎さるる那智の滝  
おじおじ触り朝市の山归来

山本 賜  
呼び水となる同席の人の咳  
ポケットに  
マスクねじこむチャーシュー麺  
ふたつの目光らせている寒鴉

鈴木 栄  
特売の体力勝負冬の陣  
みてほしくない時の夫濡れ落葉  
賞札を見てから愛でる菊花展

高田敏男  
自在鉤河豚鍋匂い落着かづ  
ジャズ好がロックで空ける新酒かな  
子沢山今日も律儀に夜なべかな

高田菲路  
着膨れて公衆トイレ待つ列に  
着膨れて靴下を着く吐息かな  
着膨れて軽自動車へ押込まれる

高橋真紀子  
月あかり密会人暴きだす  
キリギリス草に緑の羽隠す  
いつの間にか居眠りしてる夜なべかな

横山喜三郎  
祖母様のおめかしに飽き七五三  
篤姫をすつぽんぽんに菊師たち  
片言の憎まれ口や初笑

吉田恵子  
冬の日や朝は北側歩く吾  
低く舞ひ声も出せぬか冬の蚊は  
秋遍路安楽寺から延命寺

吉野香風子  
紫おりて紫式部何の色  
かまど猫女のひとり言を聞く  
戦友と言へば女房気にもせず

渡辺さだを  
晩年のデートはいつも日向ぼこ  
スケーター尻もちつくもご愛敬  
ベレー帽被て二科展に画家きどり

渡邊美代子  
朝の富士夕べの富士や大根干す  
棧橋で沙魚釣る人のハーモニカ  
地下鉄が地上を走る菊日和